

公正中立などありえない。
 なぜなら情報は視点なのだ。主観的で当たり前。
 ところが現在のマスメディアは、
 ありえない公正中立を偽装している。
 特に大メディアになればなるほど、
 この建て前は崩せないのだろうか。

……僕のその思いを、この作品はあっさりと覆した。
 全編にみなぎる人々の怒りと悲しみは、
 撮影クルーや取材する記者たちの
 怒りと悲しみの声でもある。
 すがすがしいほどに主観全開。それでいい。
 だってそれが本来のメディアなのだから。

——森 達也(作家・映画監督)



日本は未だにアメリカの植民地じゃないか。
 それが沖縄の現実だ。
 その最も象徴的な理不尽さに闘いを挑んでいる
 東村高江の人々。
 米軍の軍事訓練の標的にされながら
 生活するその過酷な日常は
 殆ど報道されず、黙殺されている。
 この映画はそれを訴える。
 これは僕らの現実でもあり
 高江の人々の闘いは僕らの希望なのだ。

——遠藤ミチロウ(ミュージシャン)

アメリカ軍・普天間基地が封鎖された日 全国ニュースから黙殺されたドキュメント



日本にあるアメリカ軍基地・専用施設の74%が密集する沖縄。5年前、新型輸送機「オスプレイ」着陸帯建設に反対し座り込んだ東村・高江の住民を国は「通行妨害」で訴えた。反対運動を委縮させるSLAPP裁判※1だ。わがもの顔で飛び回る米軍のヘリ。自分たちは「標的」なのかと憤る住民たちに、かつてベトナム戦争時に造られたベトナム村※2の記憶がよみがえる。10万人が結集した県民大会の直後、日本政府は電話一本で県に「オスプレイ」配備を通達。そして、ついに沖縄の怒りが爆発した。



2012年9月29日、強硬配備前夜。台風17号の暴風の中、人々はアメリカ軍普天間基地ゲート前に身を投げ出し、車を並べ、22時間にわたってこれを完全封鎖したのだ。この前代未聞の出来事の一部始終を地元テレビ局・琉球朝日放送の報道クルーたちが記録していた。真っ先に座り込んだのは、あの沖縄戦や米軍統治下の苦しみを知る老人たちだった。強制排除に乗り出した警察との激しい衝突。闘いの最中に響く、歌。駆け付けたジャーナリストさえもが排除されていく。そんな日本人同士の争いを見下ろす若い米兵たち……。

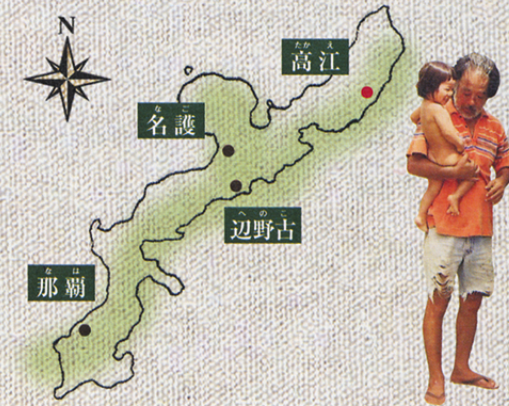


本作があぶりだそうとするのは、さらにその向こうにいる何者かだ。復帰後40年経ってなお切りひろげられる沖縄の傷。沖縄の人々は一体誰と戦っているのか。抵抗むなしく、絶望する大人たちの傍らで11才の少女が言う。「お父さんとお母さんが頑張れなくなったら、私が引き継いでいく。私は高江をあきらめない」。奪われた土地と海と空と引き換えに、私たち日本人は何を欲しているのか？



SLAPP裁判 ※1
 国策に反対する住民を国が訴える。力のある団体が声を上げた個人を訴える弾圧・恫喝目的の裁判をアメリカではSLAPP (Strategic Lawsuit Against Public Participation) 裁判と呼び、多くの州で禁じられている。

ベトナム村 ※2
 1960年代、ベトナム戦を想定して沖縄の演習場内に造られた村。農村に潜むゲリラ兵士を見つけ出して確保する襲撃訓練が行われていた。そこで高江の住民がたびたび南ベトナム人の役をさせられていた。



www.hyoteki.com

「標的の村」茨城披露上映会

2月27日(木) 茨城県民文化センター小ホール

① 10:30~12:05 ② 14:30~16:05 ③ 18:30~20:05 (各回30分前開場)

参加費 前売り 1,000円(当日1,300円) 県民文化センター、ひたちなか文化会館、水戸京成百貨店、他
 ●主催/映画「標的の村」上映実行委員会(実行委員長/小峯幹夫) ●事務局連絡先/226-3156(茨城映画センター内)
 ※現在、この上映会への賛同者、実行委員、協賛企画、募集中です。